

金正日総書記死去-これからの北朝鮮とその対外関係をどう見るか

ERINA調査研究部長・主任研究員
三村光弘

金正日総書記死去のインパクト

- ある意味、既定事項。織り込み済み
 - 2008年8月にすでに健康異常が報道
 - 2010年5月、8月、2011年5月に中国訪問
 - 中朝間で後継者問題に解決
 - 2010年9月第3回党代表者会
 - 金正恩氏が後継者としての認知される
 - 2011年8月、ロシア、中国訪問
 - ロシアとは北朝鮮半島縦断パイプラインの建設に向けた準備に合意

金日成主席死去の教訓

- 感歎に明け暮れてはいけない
 - 追慕の情と経済活動は別物
 - 経済活動は「生存のための闘い」
 - 1994年以降の北朝鮮経済の危機的状況を繰り返さないこと
- 初代と2代目以降は別
 - 金正日総書記は、国民に十分に食べさせるところまで経済を回復させられなかった
 - 新政権に対するプレッシャーは大きい

北朝鮮国民の指導者に対する考え

- 外部世界で思われているほど盲信していない
 - オーナ企業の社長と考えればよい
 - 表だって批判はしないが、失政をすれば人気はなくなる
 - 非民主主義社会「民意」の重み→正統性に直結
- 指導者に重きを置く体制の特徴
 - 指導者がいないと国が持たない
- すでに「核保有国」となった安心感

今後の作業

- 後継者に党、軍、政府の役職を割り当てる
 - 北朝鮮労働党総書記
 - 北朝鮮労働党中央軍事委員会委員長（現在は副）
 - 北朝鮮民主主義人民共和国国防委員会委員長
- 宣伝・扇動部門を通じた後継者の「神格化」
 - 文字通りの神と思う人はほとんどいない
 - 後継者がいないことが不安要素になる社会
 - 国民の「変化への期待」の汲み上げは？

指導者交代で変わることに

- 国際社会の変化への期待
 - 核放棄、関係改善、より開放的な経済政策
- 国際社会の不安
 - スムーズな新体制への移行
 - 国際社会は「腫れ物に触るような」態度へ
- 北朝鮮国民の変化への期待
 - 「核保有国」としての国際舞台への船出
 - よりスマートな、より現代的な演出への期待

指導者交代で変わらないこと

- 北朝鮮経済の持つ問題点
 - 国民生活の保障
 - 資本不足、産業構造・産業配置の改善
 - 経済回復から持続的成長への道筋の提示
- 対外関係改善と大量破壊兵器放棄の必要性
 - 米国がどの程度の要求をするかによるところも
 - 中国も北朝鮮の核保有には反対

北東アジアの国際関係 の変化と北朝鮮

- これまでの変化
 - 中国経済の成長と「大国」としての影響力上昇
 - 韓国経済の成長と国際的影響力上昇
 - ロシア経済の好調と「再大国化」の動き
 - 日本の沈滞と自信喪失、「内向き」な態度
 - 米国経済の衰退と同盟国に対する「思いやりのない」政策（韓米FTA、TPP）とそれに対抗する中国の提案（日中韓FTA、韓中FTA）

北東アジアの国際関係 の変化と北朝鮮

- 2012年の北東アジア
 - 韓国、ロシア、モンゴル、米国、台湾の大統領・総統・総選挙(台湾は国民党が勝利)
 - 中国共産党の指導者交代
- 2012～13年は調整と不安定さの2つが特徴
 - 同時に新たなことが始まる可能性も秘める
- 北朝鮮もこの流れに乗ることができるか？

ポスト金正日体制と対外関係

- 北朝鮮(経済)の不確実性を引き受けることができる唯一の国、中国
 - 韓国は5年ごとに政策の方向性が変化→北朝鮮の実験失敗に対する安全網とはなりえない
 - 当面は中国の支援と経済協力が北朝鮮にとっての命綱
- 中国依存を一方向的に深めることのリスク
 - 中国依存からの脱却が中長期的な課題

ポスト金正日体制と対外関係

- 確実な支援提供者の存在が必要
 - 現在の関係

北朝鮮経済の現状

- 1990年代末以降20年以上にわたって回復
 - 大規模な餓死はない
 - 慢性的な食糧不足
- 21世紀に入り、経済改革の試み
 - 本格的な市場化の導入はまだ
- 対外経済関係の変化
 - 21世紀に入り、中国・韓国との関係が主に
 - 日本との関係希薄化

北朝鮮の貿易総額に占める 各国の割合(2010年)

	輸出シェア	輸入シェア	合計シェア
中国	49.9%	61.5%	56.9%
ロシア	1.1%	2.3%	1.8%
日本	0.0%	0.0%	0.0%
韓国	36.5%	28.2%	31.4%
タイ	0.9%	0.8%	0.8%
インド	1.4%	0.7%	1.0%
その他	1.0%	6.6%	4.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%

(出所)『北東アジア経済データブック2011』(ERINA、2011)より作成

北朝鮮経済の現状

- 2010年以降、体制外改革を通じた新たな経済セクターの建設に注力
 - 外国投資の誘致によりインフラや産業基盤の建設、整備(大豊グループ、合併投資委員会等)
 - 産業構造・配置の改善を通じた将来の市場競争の可能性の育成(中国の「双軌制」、「増量改革」類似の政策を行いうる客観的な条件形成)
 - 国内経済体制改革も待ったなし
- 対外関係は現在のところ中国一辺倒

中朝間の主な経済プロジェクト

- 中朝間の「共同管理・共同開発」
 - 黄金坪・威化島経済地帯の開発
 - 羅先経済貿易地帯の開発
- 中国の下請け
 - 衣料品縫製等の委託加工
- 資源供給基地
 - 無煙炭、非鉄金属等の輸出
- 新鴨緑江大橋建設

進行する新鴨緑江大橋建設 (丹東～新義州)



黄金坪・威化島経済地帯の開発

- 中国に隣接する地域に経済特区
 - 中国・丹東市に隣接する16平方キロメートルの黄金坪島と鴨緑江に浮かぶ威化島を経済特区として開発
 - 現在は農地以外何もない地域で開発は容易。
 - 問題は投資条件(投資保護、優遇政策、税制、利益の送金等)がどうなるか。
 - 2011年12月8日は、基本となる法が制定と報道

中国の経済発展計画の一部としてとらえられている黄金坪特区



黄金塀の中国側境界線



羅先經濟貿易地帯の開発

- 軽工業
 - 中国企業用の工業団地の造成
- 重工業
 - 石油精製工場の再稼働に向けた投資
 - 石炭火力発電所の建設
 - 自動車組み立てラインの設置
- インフラ整備
 - 中国・琿春～羅先經濟貿易地帯への電力供給

中朝間の経済プロジェクトの 規定要因

- 中国の国家計画、プロジェクト
 - 第12次5カ年計画
 - 東北振興政策
 - 西部大開発
- 中国の地方の経済開発プロジェクト
 - 遼寧省
 - 吉林省
- 中国の事情に北朝鮮が合わせるかたち

北朝鮮にとっての課題

- 中国への依存の深化をどう処理するか
 - 新政権の不安定さが、中国依存を加速
 - 周辺国との関係はロシアを除いて不安定
- 中国へのシフトを打ち消す要因として...
 - ロシアとの経済プロジェクトの推進
 - 南北経済関係の再推進
 - 欧州、東南アジアとの経済関係深化
 - 最終的には、米国、日本との関係改善が必要

北東アジアで今後起こりうる変化

- 中国の北朝鮮半島を含む北東アジアにおける関与・影響力の増加(日中韓FTA交渉開始)
- 韓国の中国への接近と経済連携の強化(韓中FTA等)
- ロシアの太平洋への進出と北東アジア諸国との関係強化
- 北朝鮮の新指導陣の現実的な経済政策の選択

北東アジアの中心に位置する北朝鮮半島



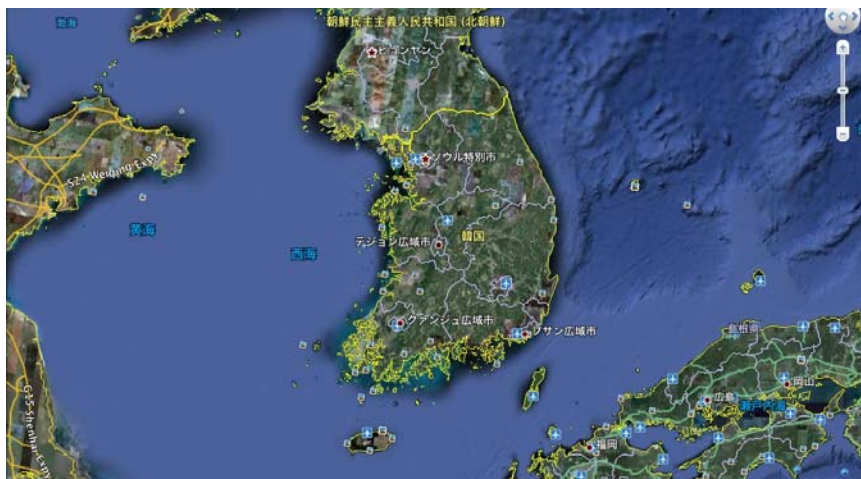
北東アジアにおける変化の前提

- 米国の対アジア政策の変化
 - 北朝鮮に対する外交姿勢の変化＝「戦略的忍耐」から積極的な対話へ
 - 米国にとって、北東アジアにおける緊張の継続が必須の要件ではなくなる必要
 - 韓国、日本の政策もそれにつれて変化
- 米中関係の変化
 - 中国が東アジアの調整役として認められる
 - 東アジアにおいての日本の位置の沈下

北東アジアで将来起こりうる変化

- 北東アジアにおける日中韓の「戦略的」協力増進と協力関係の積み重ねによる相互関係の安定
- 北朝鮮の経済政策の変化にともなう、中朝経済関係、南北経済関係の活性化
- 韓国の「島国」からの脱却と中国（東北・華北）経済圏との関係強化
- 米国中心の国際秩序から地域の強大国による協力への穏やかな移行

ソウル～平壤は釜山より近い



北朝鮮は北東アジア 経済協力の焦点に

- 物流／人流
 - － 在来線・高速道路でソウル～平壤は3時間、瀋陽は10時間(改良後)
 - － 高速鉄道でソウル～平壤1時間、瀋陽3時間、北京6時間
 - － 北朝鮮半島西部と遼寧省、華北地方は一体化
 - － 中国・黒龍江省、吉林省、ロシア・沿海州と日本や韓国を結ぶ有カルートとしての羅津、清津
 - － 「朝食をソウルで、昼食を平壤で、夕食は瀋陽で」

北東アジア発展の「夢」の実現と 日本

- 北朝鮮の新政権の変化を誘導する必要
 - 中立な相手をわざわざ敵にする必要はない
- 朝鮮半島問題における周辺国との連携
 - 日韓米の結束の強化
 - 中ロとの緊密な情報交換
- 朝鮮半島の未来に対するビジョンの提供
 - 国際的貢献
 - 「環日本海経済圏」構想の実現のチャンス